

編集後記

一九八五年度最後の「文学論叢」をお届けする。

この一年愛知大学内は表面的には静かであるが、激動とも言ふべき時が経過したと思う。世界的な学園紛争後、大学はしばしの平穩を味わった感があったが、その間も大きな内部変換を迫られていた。愛知大学は平穩のまどろみを他大学よりも少々長くし過ぎたのかも知れない。今後数年は、遅れて急ぐ者の苦痛をかみしめながら試練に堪えねばならない。

この期に文学会所属の五教授が退職される。経歴や業績は本論叢中に掲載されているように様々であるが、いずれも各学界に、また愛知大学内に大きな足跡を残された。

五教授のうちでも、国文学の津之地教授と英文学の松岡教授は、愛知大学創設期に在職された今では数少ない教授たちである。愛知大学のこの多難期に去られることとくに心を残されるであろうと推察する。現在在職する者の大学の将来に対する任は重いと思う。退職される五教授が今後も健康で活躍されることを心より祈念している。

(S)

昭和六十一年三月二十日 印刷
昭和六十一年三月二十五日 発行（非売品）

編者 愛知大学文学會
代表者 湯本和男

印刷所 刈谷市幸町
株式会社 刈谷高速印刷

発行所 豊橋市町畑町
愛知大学文学會
振替 名古屋三三四五六五四